



「童話化」について(六)

本田 和子

四、「童話化」の現状と様々な問題。

成人の世界に産み出された幾つかの物語が、子供の世界に取り入れられることはそれだけ子供の生活を豊かにする。

更に Terman によれば、十二・三歳頃から児童の間に児童図書を嫌がる傾向がみられるといわれ、Howard も子供達は彼等を "Dear little" として扱う本をしりぞけて "equal" として対するものを好むといっている。成人の物語を通して成人の世界を探ろうとするのもあるうか。

ともあれ、この機会を逃さず、適当に取捨選択して成人の物語を与え、古典への眼を開かせることは意味深く思われる。

成人を対象として産まれながら、現在子供のものと化している物語

は「本来どんな性質をもっていたか」「それがどう変化して子供の物語となつて、いるか」それについて考えてみた。

現在「童話化」している物語は、充実した筋を持ち、動的でスピーディな展開をする。そしてはつきりした結末をもつ浪漫的な作品が多かった。

それらの物語が短縮され、説明調になり、言語・描写が児童的に平易になり、強い刺戟・残酷性は幾分感傷的に柔らげられ、性的な事件・感情は省かれるか簡約化される。そして、結果として原作より単純に不合理になる傾向があった。

筋が充実していること、これは児童のための物語にとつて本質的な条件であるとされている。物語に対する児童の態度は、決して知識を得ようとか、人生を学ぼうという意識的な目的意識に支配されたものではない。「礼儀は強制することが出来るが、読書は強制し得な

い」とは Hazard の言である。児童の求めるものが不均衡への刺戟であり、それを實際経験によらず情緒的興奮だけで味わおうとしているなら、そして、知的な興味というものも、親密性と反親密性の交錯の中に、直接に見聞し得ない事物に対して、向けられるとすれば、更に、物語の中に起る大きな変化によって緊張解消を欲しているならば、「事件に富んだ筋をもつ」ということは不可欠の条件であろう。

動的で、展開がスピーデイであるためには時間の進行と一致した物語の進行が最もよい方法として要求される。児童において早く発達するのは時間と併行した因果論理であることを考えると、これも児童に受け入れられ易いのは当然である。

結末が明確であることも当然、備うべき条件の一つであろう。物語の性質が起伏に富んだものであるだけに、事件を見まもる子供達の目的成就への欲求は可成り強くなるものと思われる。故に、この緊張を解消させるためには事件が一段落つくことが望ましいのである。

「童話化」された作品は、形が説明調になっているが、これは児童の初期の描画段階に知的写実とよばれるものがあつたことと思ひ合わせて興味深いものがある。知的写実とは、事物の見えるままを描かず、知っている通りに描くことである。物語においても、見えるままに描写されたものより、知っているように描写されたものの方

が受け入れられ易いのもあろう。

更に、児童は知的能力の未発達なばかりでなく、生活体験に乏しく行動範囲も狭いから、余りに複雑多岐な社会世相の描写や、風刺・皮肉は理解し難い。簡約化され、平易になり、単純化されるのは当然である。

結果として生じる原作に比しての不合理性は、児童の論理的思考力・批判能力の未熟さを、支配的な情緒性によって黙許されている現象であらう。

以上、まとめたのが「童話化」の現状である。これは、児童の世界に受け入れられているものだけに、先にみたように児童との結びつきも密である。然し、ここに考えねばならない幾つかの問題が横たわっているように思えるのである。

先ず取材であるが、「プロットの充実性」が必須条件であるからといって、それは必ずしも「波瀾万丈な主人公の運命」を描写した物語だけ「童話化」の素材であることを意味しない。にもかかわらず、取材の範囲に著しい偏向がみられるのは一つの問題であらう。

子供の要求がそこにあるにしても、与える側としては子供の世界に反映させる材料を多方向から選ばねばならない。この意味から新しい傾向の作品の「童話化」は望ましいことである。然し、それをどのような技術で「童話と化し、どのようにして子供の世界に浸透させたらいいかは、今後の問題であり、困難な問題であらう。

「童話化」の手續きに際しては、興味本位に筋だけが抜き出されることが問題となる。文学の持つ教育性の源泉は、作家の世界観・思想・知性などが単なる理論としてではなく、具体的な事物に即して感動をこめて語られる所にある。筋だけを追うことの無意味さを考えねばならない。平易に語り変えられることは必要な過程であるが、これが往々原作のニュアンスを消失させる恐れを持っている。心ない筆が、或いは言葉が、仮作物語めいたダイジェスト的なものに変えてしまう危険性は少なくない。これは日本語のむずかしさにも一因がある。

以上、現状にみられる問題点を幾つか挙げてみた。然し、「童話化」というこの現象は児童の世界を富ます意味で望ましいものと思われる。児童に与える物語の範囲を単に狭く既成の童話に限らず、より広い視野の下に取材することを可能にすること。新しい童話の材料を求めるいとまを、児童の周囲にある成人達が持つことの出来なかつた場合、自身の感動を受けた物語の幾つかを改造して伝えることが出来ること、成人と子供が共通の感動体験の基盤をもつこと。などその効果は数えられるであらう。作家という特定の人を除けば、多くの成人達がよりよい児童文学の前進のために役立ち得る行為は、よい物語の選択とその与え方に集約される。ここで考えてみた「童話化」の考察が、このような児童を包む人々にとつて、幾分の参考ともなればさいわいである。〔完〕（筆者は尚綱女学院講師）

倉橋記念文庫

御協力の御芳名

かねてより、私共相はかり、倉橋記念文庫の計画を企て御協力をお願いいたしましたところ、幸い皆様方の御讃同を頂き、多分の御拠金を賜りましてまことに有難く存じました。

つきまして、第四回の発表、昭和三十一年四月二十日以後、昭和三十一年九月二十五日までの御芳名を左に掲載させていただきます。御協力を謝し、受領証にかえさせていただきます。（発表は到着順敬称略）

昭和三十一年九月二十五日

倉橋記念文庫係り

代表 及川ふみ

津守 山村きよ

一、〇〇〇

今城明雄

五〇〇〇

後藤いく子

「幼児の教育」

大正十四年以降昭和十九年十二月まで約一八〇冊

立野みえ

著書九冊
価格二八七〇

山下俊郎

以上合計 三三八一七〇